

【創立記念講演録抜粋】

期待を込めて！

—陸自改革のエンジン、教育訓練研究本部—

第34代陸上幕僚長 元陸将 岩田 清文 氏

はじめに

現役当時2回、同じ職場で一緒に仕事をし、直接私を支えてくれた最も信頼する元部下から、陸上自衛隊教育訓練研究本部（以下「教育訓練研究本部」という。）の創立記念行事に協力して欲しいとの要請があり、教育訓練研究本部を創設した責任者として、その務めを果たさせていただこうと考え、本日、現役の皆さんにお会いできることを楽しみにして参りました。



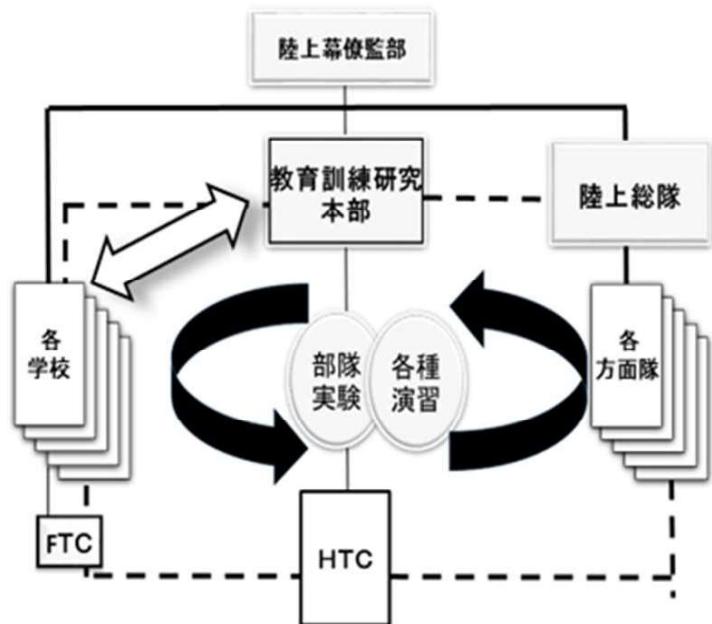
何故この教育訓練研究本部という組織を創ったのか、時間の許す限りお話ししたいと思います。

教育訓練研究本部の創設は、陸上幕僚長に就任する以前から、過去の勤務経験を通じて、このような組織を創設する必要があると長年想い描いていました。たまたま陸上幕僚長に就任し陸上自衛隊の改革を実現できる機会に恵まれたので、陸上総隊等、他の改革と併せてこれまでの想いを込め、陸上自衛隊を常規的に改革していく組織を創設しました。

1 教育訓練研究本部の必要性

(1) 職種と教育訓練研究本部

編制・装備に関する防衛力整備上の責任は陸上幕僚長にあり、その編制・装備の根源となる戦い方の創造や運用構想の案出、そしてそれを陸上幕僚長に提言するのは教育訓練研究本部長が実施すべきであり、また、教育訓練研究本部長でなければ実施できないと考えています。また陸上防衛構想における各機能としての職種の戦い方は各職種学校長が責任をもつべきであると考えています。



25 大綱で教育訓練研究本部を創設するにあたり、これまで研究本部が保持していた職種に関する研究の権限を各職種学校に委譲し、職種のことは各職種学校長が責任をもって実施できるようにしました。教育訓練研究本部長は、各職種学校長からその知見・経験・意見を汲み上げ、陸上自衛隊全体の戦い方の中で整合を図ることにより戦い方の総合一体化ができる仕組みに変更しました。この改革においては、各職種学校長は職種における戦闘要領・戦法等を改革・改善し続けて、防衛力整備や教範へ反映させるとともに、部隊における練成訓練に横串を刺していく役割を担っています。組織を強くするには縦串のみならず、横串も重要と考えています。練成訓練において陸上幕僚長からの指示を受けた方面総監、師団長・旅団長、連隊長等がそれぞれの職責において部隊を練成していく縦串の部分と、職種のプロたる職種ならではの知見や助言等の横串が縦串を補強していくことが部隊を強くしていく上で大変重要だと考えています。

例えば、過去、私が方面総監部の幕僚副長、師団長及び方面総監当時、職種部隊の訓練検閲の際は、職種運用に関わる部分について、各職種学校長に依頼して補助官等を派遣してもらい、横串としての職種の評価や指導・改善事項を助言していただきました。

(2) 情報の発信

ロシアが仕掛けたハイブリッド戦のような新たな戦い方についても、どの書籍よりもどの研究機関よりも先に教育訓練研究本部が刊行する機関誌において、戦いの変化の兆候が指摘されているという先進的な機関誌になって欲しいと願っています。日本にも安全保障や防衛に関する研究者の方々が沢山おられますので、こぞって教育訓練研究本部が刊行する機関誌を読みたい、勉強させてもらいたいという状況になって欲しいと思います。

そしてそういう研究が継続されるからこそ、いい教育に繋がっていくのだと信じています。

(3) 進化のスパイラル

改革・改善の発起点は、問題の気付きや認識にあると考えています。このため、より実戦的、実際的な演習や部隊実験を繰り返し実施して、強靭な陸上自衛隊の創造に資する編制・装備・組織・態勢と現状とのギャップを見出すことが重要だと考えています。この際、日米共同演習、自衛隊統合演習、陸上自衛隊演習、南西防衛を焦点にした鎮西演習、兵站演習、総合戦闘力演習等の各種演習を通じ、本当にこれで戦えるのかという視点から改革・改善のポイントを見出し、演習目標の確立や演習実施の要領からも問題点を見出しが改革・改善に反映して、次なる進化した演習目標の確立等に繋げるという進化のスパイラルを継続して行くことが緊要です。

陸上自衛隊精強化の観点から総合的・一体的な改革・改善というスパイラルを推進し、陸上幕僚長、総隊司令官、方面総監等へ進言、提言し得るのは教育訓練研究本部長のみしかいないと考えていますし、そういう組織になって欲しいと願っています。

(4) 改革のエンジン

大胆に陸軍改革を進めている米陸軍の知見・経験を参考とするため、平成26年2月、米陸軍参謀長及び米陸軍訓練教義コマンド(TRADOC) 司令官を訪問し議論を行いました。

TRADOC 司令官との懇談においては、当然ながら陸上自衛隊の教育訓練研究本部の創設が主題となりましたが、貴重な認識を共有することができました。その中で強く印象に残ったことは、米陸軍の改革は TRADOC が主導していること、TRADOC が如何に改革を

主導し続けるかがキーであること、そして TRADOC にはキーパーソンとなる各部長達スタッフが如何に米陸軍を強くするか、日々、真剣な議論を重ねる中で、改革のスパイラルを回しているということでした。

まさに教育訓練研究本部を陸自改革のエンジンと位置づけ、進化のスパイラルを主導的に推進させていく体制を創りあげることが陸上自衛隊精強化に不可欠であると強く確信しました。陸自改革のエンジンは教育訓練研究本部であり、陸自改革のスパイラルを教育訓練研究本部が主導的に回し続けられるかどうかは、教育訓練研究本部職員皆さんにかかっています。

(5) 更なる将来ビジョン

統合幕僚副長当時、目黒地区は統合運用研究のメッカ（総本山）にすべきだと考えていました。統幕学校、海上自衛隊及び航空自衛隊の幹部学校には研究部門があります。ここに陸上自衛隊の研究部門が加わることにより、統合で敵に勝つための陸・海・空・統合のスパイラルを回していくべきだと強い想いがありました。そういう想いからも教育訓練研究本部の新設地は目黒でしかないはずと思っていました。

米軍は戦争実施前、作戦計画を研究機関等においてシミュレーションし、作戦計画の検証を実施して改善を加えた上で、作戦に臨むと聞いています。このような実行段階の作戦は勿論、将来に備えて防衛力を整備して行く上で、真に日本を防衛するために足らざる統合作戦能力は何かを、ここ目黒において陸・海・空・統合の研究部門が共同で検証していくけるスパイラル体制を創り上げるべきと思っています。どうか教育訓練研究本部が統合・海・空を刺激して起爆剤となり、目黒が統合運用研究のメッカになるように変えていただけたら有難いと思っています。

2 教育訓練研究本部への期待

(1) 存在への自問自答

教育訓練研究本部は、強靭な陸上自衛隊の創造のための「常続的な自己改革機能」、いわゆる「陸自改革のエンジン」であるとの位置づけで創設しました。定期的ではなく常続的に実施することが重要です。このためには常に問題点を見出し、問題解決のための陸自改

革案を案出して防衛力整備への提言並びに戦い方（運用ドクトリン）等の運用訓練のあるべき姿を策定し、これを各部隊、学校に対して普及するとともに各種訓練の評価支援を行うことが重要です。

「教育訓練研究本部は何のために存在するのか」そして「陸上自衛隊は本当にこれで勝てるのか」を常に自問自答しながら、改革のスパイラルを回し続けていただきたいと願っています。

(2) 着意事項

教育・訓練・研究のスパイラルを強力に推進すると共に、スピード感が極めて重要であると考えています。ロシア軍がハイブリッド戦を遂行してから5年経ってやっとそのことに気付き、これから準備するようでは世界の戦いの変化に対応できていないと考えています。

陸上自衛隊全体にスピード感を持たせるためには、スピード感を教育訓練研究本部が自ら持ち続けるとともに、世界のスピードを追い越していくだけの危機意識を常に持ち続けることが重要と思います。

(3) 各 部

教育訓練研究本部を創設するにあたり、各部の期待値を以下のように考えていました。

研究部は、将来の陸上自衛隊を創造することであり、真に我が国を守り得る戦い方を創造するとともに、戦い方の改革・改善することです。

教育部は、将来真に有用な人材を育成することであり、戦い方を具現し、真に強靭な陸上自衛隊を創造するとともに、自衛隊をリードし改革していく有用な人材を育成することです。

訓練評価部は、部隊の精強化へ積極的に寄与することであり、戦い方を確立するための教訓等を収集するとともに、確立された戦い方を練成訓練とその評価へ反映することです。

総合企画部は、各部・各機能の迅速な融合を図り、スパイラル化することであり、常続的に陸上自衛隊の改革・改善を図るため、スパイラルを強力に推進していくことです。

(4) 意識

今日ここにいる皆様は、強靭な陸上自衛隊に改革していく組織の一員であり陸自改革の具現者でもあります。そして、このことに誇りや矜持を持っていただきたいと考えています。強く言っておきますが、教育訓練研究本部は単に幹部学校と研究本部を合わせた組織ではありません。各職種学校に対する強い「統制権」を持たせるとともに、地位役割からも陸上幕僚長に対し陸上自衛隊強靭化のためであれば何でも、そして強く進言できる組織を創ったつもりです。また10年20年先を見据え、どっしりと腰を据えて将来について組織的、継続的、計画的、大々的に研究・検討し得るのはここ教育訓練研究本部だけだと考えています

「我々がやらずに誰がやる」との意識を堅持して欲しいと願います。

更に、このような大きな改革を断行するにあたっては、必ず反対する者が出できます。変えようとすればするほど、その変化が強いほど、反作用が生起します。昔を懐かしみ、現状に胡坐（あぐら）をかいて安穏としている人達、いわゆる抵抗勢力です。こういう人たち程、将来に対する危機意識と将来ビジョンを持っていないと感じます。そういう人たちに構う時間はありません。ここにいる皆様が意識を強く持ち、陸自改革を断行していっていただきたいと考えています。

(5) 世界の戦い方の進化に先行、リード

ハイブリッド戦のその先は、是非、皆様に創造していただきたいと期待しています。

ダーウィンの進化論を適用すれば、変化への対応を怠った組織は自然淘汰されるということですが、今やその「変化を作り出す者が勝つ時代」という意識が重要とする人もいます。変化に追いつくだけではなく、世の変化を一早く察知し、我に有利な変化・進化へと変えていかないと負ける時代になっているのです。将来を敏感に意識し深く広く研究して新たな陸上自衛隊を創造していくのは、ここ教育訓練研究本部です。

頑張ってください。応援しています！



陸上自衛隊

陸上自衛隊教育訓練研究本部

陸上自衛隊教育訓練研究本部

陸上自衛隊教育訓練研究本部